

児童・教師・保護者の取り組みによる学校エンゲージメント向上の試み

An Attempt to Improve School Engagement by Activities of Children, Teachers and Parents

田中由賀里, 阪根 健二, 大林 正史, 池田 誠喜

TANAKA Yukari, SAKANE Kenji, OBAYASHI Masafumi and IKEDA Seiki

鳴門教育大学学校教育研究紀要

第33号

Bulletin of Center for Collaboration in Community

Naruto University of Education

No.33, Feb., 2019

児童・教師・保護者の取り組みによる学校エンゲージメント向上の試み

An Attempt to Improve School Engagement by Activities of Children, Teachers and Parents

田中由賀里, 阪根 健二, 大林 正史, 池田 誠喜

〒772-8502 鳴門市鳴門町高島字中島748番地 鳴門教育大学大学院
TANAKA Yukari, SAKANE Kenji, OBAYASHI Masafumi and IKEDA Seiki
Naruto University of Education, Graduate School
748 Nakajima, Takashima, Naruto-cho, Naruto-shi, 772-8502, Japan

抄録：本稿は、小学生の学習習慣の形成を図ることにより学校エンゲージメントを高めることを目指した教育実践の報告である。①学習習慣の形成のための児童の取り組みとして、学習環境雰囲気づくり、学習状況の把握と意識化、中学生との交流により学習意欲の醸成。②教師の指導力の向上。③保護者への取り組みとして家庭学習に対する保護者の支援を促す取り組み。の3つの活動を実施した。

結果、小学生の学校エンゲージメント、家庭学習力の一定の効果と課題が確認されたとともに、家庭学習力と学校エンゲージメントの関連が見出された。

キーワード：学校エンゲージメント, 学習習慣, 家庭学習力, 指導力向上

Abstract : This paper is a report on educational practice aimed at raising school engagement by trying to form elementary students' learning habits. In practice, we conducted the following three activities. ① As a child's efforts to form a learning habit, creating a learning environment atmosphere, grasping and awareness of the learning situation, fostering motivation for learning by interaction with junior high school students. ② Improve teacher leadership skills. ③ Initiatives to encourage parents' support for home learning as an approach to parents. As a result, certain effects and problems of elementary school children's home school engagement, home learning ability were confirmed, and association between home learning ability and school engagement was found.

Keywords : school engagement, learning habits, home learning

I はじめに

1 今日的教育課題

児童が主体的に学びに向かうことが今日の教育課題の一つとして挙げられている中、平成30年度より小学校で開始された学習指導要領（文部科学省，2017）は、資質・能力の成長に目標を置き、全ての教科が①知識及び技能が習得されるようにすること、②思考力、判断力、表現力等を育成すること、③学びに向かう力、人間性等を涵養すること、の3つの柱で整理され、児童生徒に主体的・対話的で深い学びが実現するよう改訂が行われた。この改訂された学習指導要領が示した内容について、無藤（2018）は、知的な力としての知識とそれに基づく思考力等、それを進める学びのエンジンとなる情意的・協働的な力を自覚的に働かせることが大切であることを指摘している。

改訂学習指導要領（文部科学省，2017）は、アクティブな学びの具体的な授業改善の視点を「主体的・対話的

で深い学び」としている。その中でも「主体的な学び」の視点は、学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しを持って粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次になる学びの実現と、子ども自身が興味を持って積極的に取り組むとともに学習活動を自ら振り返り、先の見通しを立てて子ども自身が身に付いた資質・能力を自覚したり、共有したりできるようにすることを目的としている。

学習者は、学校を卒業した後々も自律的な学び手となることが期待されており、新たな知識を獲得しながら、課題解決のための力を伸ばしていくことが求められている。「主体的な学び」を促進するためには学び続けることが大切であり、そのための粘り強く最後まで取り組む姿勢や難しいことにも挑戦することのできる力が必要である。子どもたちが学んできたことを振り返り、挑戦しようとすることに対する見通しを持つことができるようになること、学ぶおもしろさや、有能感、充実感を味わうことのできる教育実践が教師に求められている。

2 学校エンゲージメント

学習への動機付けにかかわる概念として、エンゲージメントが注目されてきている(鹿毛, 2016)。中谷(2015)によると、教育心理学研究において、近年、注目されるエンゲージメント概念は、学習への主体的・能動的な関与を意味する概念であり、単なる学習適応の考えの枠を越えて、動機づけを含む積極的な関与状態を示しているとされている。森(2018)は、島井(2016)の「アクティブ・ラーニングがエンゲージメントをもたらすものである」という考えを取り上げ、エンゲージメント概念が平成29年に学習指導要領で示された、「主体的・対話的で深い学び」の状態を示す指標となりうるものであり、「授業に対するやる気が出る」「継続して取り組む」といった、児童が積極的に環境へ働きかけることをイメージさせるものであることを述べている。これらの指摘を裏付ける状況として、近年、欧米では、学校教育にエンゲージメント概念を取り入れた取り組みが行われている(例えば、Fredericksら, 2004)。ただし、学校でのエンゲージメント概念の活用は、同義ながら様々な呼称が用いられており(例えば“student engagement”, “school engagement”など)、日本においても、統一されていないのが現状である。本稿では、学校で児童生徒にエンゲージメントの状態を生み出す取り組みを、学校エンゲージメントとして記述する。

Lippman & Rivers (2008)によると、学校エンゲージメントは、①行動エンゲージメント：課題に注意を向け努力し粘り強く取り組んでいる状態、②感情エンゲージメント：興味や楽しさというポジティブな感情を伴って取り組んでいる状態、③認知的エンゲージメント：物事を深く理解しようとするとともに、意図をもってハイレベルな技能を身につけようと自身の活動・計画・モニターを行うような問題解決に取り組んでいる状態、の3つの側面があることが示されている。

学校教育では多くの時間が授業での学習活動で占められており、学習を充実させることが児童の学校エンゲージメントを生み出す大きな要因の一つとなることが考えられる。そこで、本稿では学習の好循環を生み出す学習習慣の形成に注目して先行研究を整理することとした。

3 家庭学習力

学習習慣の形成に大きな影響を及ぼすものとして、家庭学習が考えられる(田中, 2017)。田中(2017)によると家庭学習力とは、「家庭での規則正しい健康な生活習慣の基盤の上に、子どもが家庭での宿題、予習、復習、そして自主的学習等を計画的かつ自律的に行うために必要な能力や態度」と示されている。

実際に子どもたちにとって、家庭学習を進める環境を整えることは難しい。田中(2017)は、家庭学習の特殊

性について、①教師という学習のペースメーカーがいない状況で、家庭では子ども自らがペースメーカーとなって自学を進めなければならない。②テレビやテレビゲーム、マンガやスマートフォンという学習阻害要因が多い、誘惑にあふれた環境の中で自律的・主体的に学ぶことが求められる。③家庭学習の質と量が、家庭の教育力によって影響を受けやすい状況の中で、自ら進んで自覚と自己責任をもって学ぶ必要がある。④宿題や学校の予習・復習だけでなく、自ら進んで読書をしたり、インターネットで調べ学習をしたり、あるいは家庭で買い求めた参考書や問題集を用いた学習をするなど、自主学習をより多くすることが学力向上を支えている。⑤自分にとって調子がでる時間帯や、学びやすい方法、苦手な教科や得意な分野など、自己の特性に応じた手作りの家庭学習法を確立する必要があると述べている。

4 学習習慣の形成にかかわる保護者・家庭支援

望ましい学習習慣が形成されるためには、児童自身の取り組み、教師の取り組みに加え、家庭での支援が重要である。田中(2008)は、教師の指導力と家庭の教育力の双方の連携によって子供の総合学力の育成により強く働くと言う仮説の検証を行っている。その際に、「個々の教師による授業改善への取組だけでは、豊かな学力を確かに育成するには十分とは言えない」「授業改善の様々な取組に加え、保護者・家庭を巻き込んだ家庭学習の充実への取組が重要である」と述べている。また、家庭教育で重視すべき点として、第一に基本的な生活習慣を挙げているとともに、学校と家庭で重視する点として学習意欲を挙げている。

5 学習習慣の形成による学校エンゲージメントモデル

上述したように、児童が学習習慣の形成のために、児童自身の取組に加え、教師、保護者・家庭の連携した支援の必要性が挙げられている。そこで、本研究では、先行研究での知見を活用し、児童の学習習慣の形成のための具体的な取組の基盤となる仮説モデルを作成した(図1)。

本モデルは、児童の学習習慣の形成を図ることにより、学校エンゲージメントを向上させるモデルである。学習習慣の形成のため3つの取組として①児童の取組(家庭学習力アンケートの活用、児童会活動)、②教師の指導力向上のための取組、③保護者・家庭の支援、を設定した。

II 目的

本実践研究の目的は、児童、教師、保護者が学習習慣の形成のための取組を行うことにより、小学生の学校エンゲージメントの向上を図ることである。児童の学習習

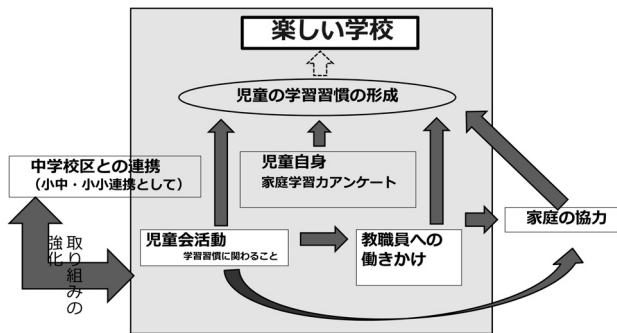


図1 学習習慣の形成による学校エンゲージメントモデル

慣を形成するため、学習習慣の形成による学校エンゲージメントモデル(図1)に基づいた実践を実施し、成果と課題を検討することとした。

Ⅲ 方法

1 研究方法

研究1 児童実態把握のためのアセスメント

児童の学校に対するエンゲージメントの状態を把握するため、児童用学校エンゲージメント尺度を作成し、エンゲージメントの状況調査を実施。また、家庭学習力の把握のために、家庭学習力尺度(田中2017)を用いた調査を実施する。

研究2 学校エンゲージメントを高めるための教育実践

児童自身が自分の伸びを実感できるようにし、さらには学習習慣に関わることに對して、ポジティブに感じることでできる取組を児童会運営委員会が企画し、全校生が参加する場を設定する。取組の中には、中学校区の学校と連携するものもある。教職員の力量アップにつながるしつけや保護者啓発も合わせて行うことにより、児童の学習習慣の形成を図る。

2 研究Ⅰ 児童実態把握のためのアセスメント

1) 児童用学校エンゲージメント尺度の作成と測定

(1) 項目の選定・作成

児童用学校エンゲージメント尺度の項目選定、作成にあたっては、Fredricksら(2005)の“School Engagement Scale”, 山岸ら(2016)が作成した「高校生のスクールエンゲージメント尺度」を参考にした。さらに、項目の表現が、生徒に十分理解されるよう配慮した。また、この項目内容は、教育学を専門とする大学教員3名および大学院生3名によって検討され、児童用学校エンゲージメント暫定尺度25項目(表1)を選定した。

(2) 調査対象及び期間

公立小学校4年生3クラス84名, 5年生3クラス73名, 6年生3クラス71名

時期は平成 X年5月

表1 児童用学校エンゲージメント暫定尺度項目

1	わたしは自分の学校のことを大切に思っている。
2	わたしは学校(クラス)の中で自分の役割を果たしている。
3	わたしは学校のルールを守っている。
4	わたしは学校で自分の力を出し切っている。
5	わたしは学校で苦手なことでも取り組んでいる。
6	わたしは学校でうまくいかないときがあれば、やり方を変えて取り組んでいる。
7	わたしは学校の授業でノートをしっかり書いている。
8	わたしは家で(4年生 50分, 5年生 60分, 6年生 70分)家庭学習をしている。
9	わたしは学校にいるのが好きである。
10	わたしは学校での時間が早くすぎていると感じる。
11	わたしは学校のできごとを楽しんでいる。
12	わたしは分からないことが分かったり、できないことができるようになったりすることがうれしい。
13	わたしは学校で友達と遊んだり話したりするのが楽しい。
14	わたしは学校で友達や先生と気持ちが通じ合っていると感じる。
15	わたしは学校で不安になったり心配になったりすることがある。
16	わたしは何かをするとき、正しいかどうか、まちがいがいなかを考へながら行動している。
17	わたしは学校でむずかしいことにも挑戦している。
18	わたしは学校でしっかり学んでいる。
19	私は勉強に関する本を読んだり、インターネットなどで調べたりしている。
20	わたしは学校でめあてをもって取り組んでいる。
21	わたしは学校で友達とおたがいに教えたり、きいたりすることが大切だと思う。
22	わたしは今の自分よりもっとよくなりたいと思う。
23	わたしは前とくらべると、自分の力がのびていると思う。
24	わたしは成績に関係のないことには積極的に取り組まない。
25	わたしには将来の夢がある。

(3) 調査材料

調査項目は、児童用エンゲージメント暫定尺度25項目(表1)を用いた。回答法は4件法とし、選択肢は、「あてはまる」「ややあてはまる」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」とし、4~1点を与えた。

(4) 調査手続き

心理的な負担を考慮し、学級ごとに担任教師による集団調査を行った。回答に要した時間は約10分であった。分析にあたっては、SPSSver23によって処理を行った。

(5) 結果

① 因子構造

測定項目の3項目について、主因子法により因子分析を実施。固有値の減衰状況をスクリープロットで確認し、3因子解が適当であると判断した。そこで、因子数を3に固定し、因子分析を実施(主因子法、プロマックス回転)。因子負荷量が.40未満の項目を除外し、再度因子分析を行い、最終的に3因子13項目を採用した(表2)。第1因子は「わたしは学校で難しいことにも挑戦している」「わたしは学校でうまくいかないときがあれば、やり方を変えて取り組んでいる。」などの内容であり、行動的なエンゲージメントに関わる内容であることから、先行研究(Fredricksら, 2012)にならい、この因子を「行動

エンゲージメント」とした。第2因子は「わたしは学校にいるのが好きである。」「わたしは学校での時間が早く過ぎていく」などの内容であり、感情的なエンゲージメントに関わる内容であることから、先行研究(Fredricksら, 2012)にならい、この因子を「感情エンゲージメント」とした。第3因子は「わたしは今の自分よりもっとよくなりたいと思う。」「わたしは学校で友達とおたがいに教えたり、聞いたりすることが大切だと思う。」などの内容であり、認知的なエンゲージメントに関わる内容であることから、先行研究(Fredricksら, 2012)にならい、この因子を「認知エンゲージメント」とした。

② 信頼性の検討

選定した項目について、尺度ごとに内的整合性による信頼性の検討を行った。「行動エンゲージメント」尺度に選定した項目の信頼性係数は $\alpha = .81$ であった。「感情エンゲージメント」尺度に選定した3項目の信頼性係数は $\alpha = .76$ であった。「認知エンゲージメント」尺度に選定した3項目の信頼性係数は $\alpha = .72$ であった。このことから、本尺度においての信頼性が確認できたと判断した(表2)。

③ 尺度得点

児童用学校エンゲージメント尺度のうち、「行動エンゲージメント」7項目の平均、「感情エンゲージメント」3項目の平均、「認知エンゲージメント」3項目の平均をそれぞれの下位尺度得点とし、全13項目の平均を学校エンゲージメント得点として算出した(表3)。

2) 家庭学習力アンケート調査の測定と結果

(1) 調査材料

家庭学習力アンケート(田中, 2017)の作成した家庭学習力アンケートを、調査対象児童が回答しやすいように筆者が文言を一部修正したものをを用いた。アンケートは8因子、24項目で構成(表4)。回答法は4件法とし、選択肢は、「とてもあてはまる」「少しあてはまる」「あまりあてはまらない」「まったくあてはまらない」とし、4

～1点を与えた。(表4)

(2) 調査対象及び期間

公立小学校4年生3クラス84名、5年生3クラス73名、6年生3クラス71名

時期は平成X年6月

(3) 調査手続き

心理的な負担を考慮し、学級ごとに担任教師による集団調査を行った。回答に要した時間は約10分であった。分析にあたっては、SPSSver23によって処理を行った。

(4) 結果

① 測定結果

家庭学習力アンケートの8因子(各3項目)のそれぞれの平均を因子の得点とし算出したものを表3に示す。

3) 考察

心理的な負担を考慮し、学級ごとに担任が実施した。エンゲージメントについては、4・5年生に比べて、6年生が低くなっている。6年生は、学校生活の中で、素直な気持ちを表現したり、受けとったりすることが難しくなっており、そのことに影響があると思われる。

表3 児童用エンゲージメント尺度得点及び家庭学習力アンケート結果

	4年 (N=84)		5年 (N=73)		6年 (N=71)	
	M	SD	M	SD	M	SD
行動エンゲージメント	3.30	.05	3.20	.53	2.80	.66
感情エンゲージメント	3.00	.80	3.10	.67	2.60	.68
認知エンゲージメント	3.50	.56	3.50	.48	3.20	.58
学習習慣平均	2.80	.70	2.80	.52	2.90	.73
生活習慣平均	3.20	.60	3.20	.62	3.10	.85
自律心平均	3.10	.50	3.10	.56	3.20	.76
自己学習力平均	2.90	.60	2.90	.67	2.90	.88
自己知識力平均	3.20	.60	3.20	1.30	3.00	.82
自己管理能力平均	2.40	.80	2.40	.77	2.20	.86
生涯学習力平均	3.00	.60	3.00	.81	3.00	.81
自己成長力平均	2.90	.80	2.90	.71	2.80	.83

表2 児童用学校エンゲージメント尺度 因子分析結果

項目	F1	F2	F3	共通性	I-T相関	α 係数
第1因子 行動エンゲージメント						
・わたしは学校で苦手なことも取り組んでいる。	.78	-.23	-.18	.51	.34	.81
・わたしは学校でむずかしいことにも挑戦している。	.68	.49	.00	.63	.44	
・わたしは学校でうまくいかないときがあれば、やり方を変えて取り組んでいる。	.66	.86	.00	.62	.42	
・わたしは学校の授業でノートをしっかりと書いている。	.57	.35	.01	.53	.30	
・わたしは学校で自分の力を出し切っている。	.51	.00	.13	.52	.31	
・私は勉強に関する本を読んだり、インターネットなどで調べたりしている。	.48	-.12	.14	.44	.20	
・わたしは何かをするとき、正しいかどうかまがいがいいかを考えながら行動している。	.43	.39	.16	.49	.26	
第2因子 感情エンゲージメント						
・わたしは学校にいるのが好きである。	-.89	1.00	-.49	.67	.48	.76
・わたしは学校のできごとを楽しんでいる。	.37	.61	.14	.49	.26	
・わたしは学校での時間が早くすぎていると感じる。	.10	.51	-.06	.59	.42	
第3因子 認知エンゲージメント						
・わたしは今の自分よりもっとよくなりたいと思う。	-.06	-.12	.94	.53	.30	.72
・わたしは前とくらべると、自分の力がのびていると思う。	.29	.18	.54	.47	.48	
・わたしは学校で友達とおたがいに教えたり、聞いたりすることが大切だと思う。	.15	.92	.45	.61	.39	

家庭学習力アンケートについては、学年別にみると、自己コントロール力と自己マネジメント力において、6年生が4・5年生と比べて、0.2ポイント低くなっていた。観点別にみると自己マネジメント力が、他項目に比べてポイントが低いことから、家庭学習の記録用紙を使って自己マネジメントの向上を図るなどの取り組みの必要性が示された。

4) 研究2 学校エンゲージメントを高めるための教育実践

学校エンゲージメントを高めるため、児童自身の力を伸ばすだけでなく、教師の指導力や保護者の協力は欠かせない。さらに、学校全体の取組とするために、児童会活動のテーマを学習習慣に関わることとし、児童会活動を活性化していくこと、教師は、それぞれの指導力を総合的に高めて、児童に効果的なフィードバックができるようにすること、保護者には、学習習慣の基盤となる生活習慣に関することや学習習慣に関する情報を提供する取組を進めていくこととした。

(1) 実践計画

① 児童の取り組み

- a. 児童の学習意欲形成のための学習環境雰囲気づくり
 - ・中学校区内学校（小学校2校・中学校1校）での家庭学習パワーアップ週間の共同実施
- b. 児童会による学習雰囲気づくり
 - ・児童会スローガン作成、学習キャラクターづくり、行事俳句募集、将来の夢ツリー設置
- c. 児童自身の学習状況の把握と意識化
 - ・家庭学習力アンケート結果のフィードバックと支援
- d. 中学生との交流活動
 - ・中学生への学習インタビューと紹介
 - ・中学校区内学校間での自主学習ノート交流

② 教師の指導力向上のための取組

- a. 教師力分析チェックシートの活用
- b. ミニ学習会の開催

③ 保護者の取組

- a. 参観授業「学級活動」での家庭学習を見直す内容の授業公開の実施
- b. 朝食レシピの募集とレシピ集の発行
- c. 学習習慣形成に関わるたよりの発行

(2) 教育実践の実際

① 児童の取組

- a. 児童の学習意欲形成のための学習環境雰囲気づくり
 - ・家庭学習パワーアップ週間の共同実施

家庭学習に頑張っ取り組もうという週間を中学校校区の3校（1中学校、2小学校）で実施した。実施時期として中学校の定期考査週間を活用、実際の実施期間は平成X年6月。

表4 家庭学習力アンケート項目

学習習慣

- ①学校の宿題を全部やりとげて、提出日に先生に出しています。
- ②家庭学習の時間と内容を決めて、毎日こつこつと取り組んでいます。
- ③学校の授業で学んだことを、家に帰ってから復習しています。

生活習慣

- ④1日にテレビを見る時間や、ゲームやメールをする時間を決めて守っています。
- ⑤毎日、早寝（10時までに寝る）早起き（6時半までに起きる）をしています。
- ⑥毎日よくにた時刻に、朝ご飯と晩ご飯を食べています。

自立心

- ⑦次の日に授業に必要な教科書やノートなどは、前の日に自分で準備します。
- ⑧家で学習をしている場所を整理し、いらぬものはかたづけています。
- ⑨学校の先生やお家の人にいわれなくても、自分から進んで家庭学習をします。

自己学習力

- ⑩学校のテストや試験の前には、家で計画を立てて学習にとりこんでいます。
- ⑪ページ数や問題の数、時間、点数など、やりとげる目標を決めて学習しています。
- ⑫学校の友だちと、宿題や自主勉強について教えあったり励まし合ったりしています。

自己コントロール力

- ⑬家で学習するときは、苦手な教科もしっかりと学習しています。
- ⑭家では、テレビやゲーム機、ケータイなどをつけないで集中して学習しています。
- ⑮やりたくない難しい問題でも、自分から進んで学習しています。

自己マネジメント力

- ⑯毎日家でどんな学習をしたか、ノートなどに記録をつけるようにしています。
- ⑰計画したとおりに家で学習できたかどうか、ふり返って反省しています。
- ⑱自分の家庭学習のしかたをふり返って、改善しています。

生涯学習力

- ⑲ふだんからテレビのニュースや新聞記事で、社会の動きを知るようにしています。
- ⑳家でも辞書を引いたり、事典やインターネットでわからないことを調べたりしています。
- ㉑マンガだけでなく、いろいろな種類の本を読むようにしています。

自己成長力

- ㉒自分の家庭学習で、できているところとできていないところがわかっています。
- ㉓自分の得意なことを伸ばすために、宿題のほかに自分から進んで家で学習しています。
- ㉔将来やりたい仕事や行きたい学校の夢をもって、家で学習をしています。

b. 児童会による学習雰囲気づくり

前年度末に、校長が児童に「どんな学校にしたいか」というアンケートを実施した結果、「みんなでつくろう元気いっぱい えがおいっぱい楽しい小学校」というスローガンが作成された。それを受け、年度の初めに、児童会運営委員会により、学校の頭文字を活用して「なかまはずれゼロ がんばれ勉強 おおきな声であいさつ」というめあてを作成した。その中で、今年度は「がんばれ勉強」を特に力を入れて取り組んでいくことを発表し、4つの取組を行った。

【学習キャラクターづくり】

「なかまはずれゼロ」に関わるやさしさ、大きな声であいさつに関わるあいさつキャラクターはすでに存在していたが、学習に関するキャラクターがなかったため、児

童から募集することにした。児童会運営委員会や担当教諭で応募されたキャラクターの中から3案に絞り、児童、教職員、PTA 執行部が投票し、最も多かったものをキャラクターとした（図2）。

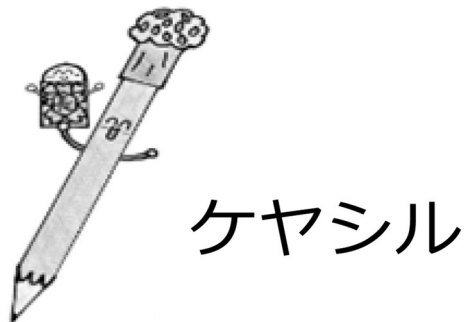


図2 学習キャラクター

学習キャラクターを作成した児童だけでなく、応募した児童にも効力感が高まるよう、すべてのキャラクター作品を掲示した。（図3）



図3 キャラクター作品を掲示

【行事俳句募集】

行事の振り返りの場として、また、保護者と一緒に家庭で取り組むということから家庭学習に直接関係するものと考え、俳句を募集し、掲示した。

【将来の夢ツリー設置】

何のために学習をするのかという目的を持って熱心に取り組んだり、学習への参加を促したりできるように、将来の夢を記入し、掲示した（図4）。

c. 児童自身の学習状況の把握と意識化

・家庭学習力アンケート結果のフィードバックと支援
「家庭学習力アンケート」（田中，2017）を活用し、児童に自分の現在の取り組み状態を可視化させ、それを定期的に見つめさせるようにした。

家庭学習パワーアップ週間前の5月と家庭学習のパ



図4 夢ツリーに将来の夢を笹につるす児童

ワーアップ週間後の2回、家庭学習力アンケートを実施し、個人に個票を返却した（図5）。



図5 家庭学習力アンケート個票

d. 中学生との交流活動

・中学生への学習インタビューと紹介

中学生から、望ましい学習習慣を形成することをインタビューし、それをポスター（図6）や動画（図7）にした。

・中学校区内学校間での自主学習ノート交流

3校で自主学習ノート（図8）を交流したりして、意欲アップの手段として活用した。学校の隣にある中学校に通う生徒の自主学習ノートに児童は大変興味を示した。また、参観日を活用して保護者も自由に手に取る機会を設けた。初めての試みとして好評で保護者啓発にもつながった。

② 教師の指導力向上のための取組

a. 教師力分析チェックシートの活用

教師自身が自分自身の教師力を客観的に把握し、省察改善を図ることができるようにするために教員人材育成指針（香川県教育委員会，2017）を参考に、使命感・責任感、コミュニケーション、自己研鑽、子供理解、学習



図6 中学校生徒会からの応援メッセージ



図7 中学校生徒会からメッセージを給食中に視聴する児童

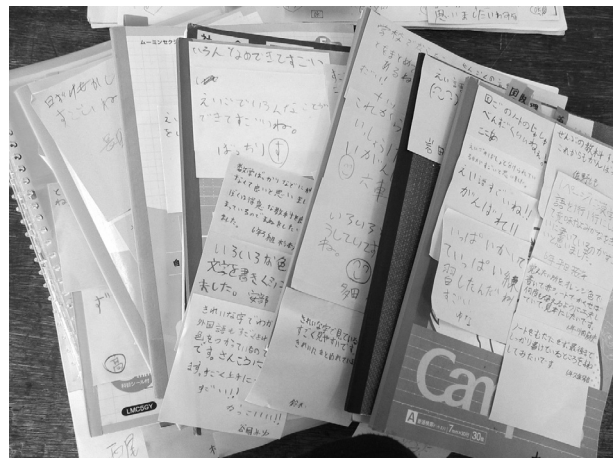


図8 中学生のノートを見て、小学生が学んだことを書いた付箋紙を付けて返却

指導、生徒指導、学校づくり、参画・運営、危機管理の9観点45項目からなる教師力のアセスメントのためのアンケート調査を実施し、結果をもとに個人チェックシートを作成した。このシートを教職員が省察することで、自分の力量が見える化され、研修や日々の実践へ参加意欲の向上を図ることとした。

アンケート結果を用いて若手教師とベテラン教師の教師力各項目について比較検討した。ベテラン教師の特徴として、適切なコミュニケーションがとれること、児童の変化の把握ができること、早期対応ができることが挙げられる。一方、若手教師の特徴は、学ぶ姿勢をもって

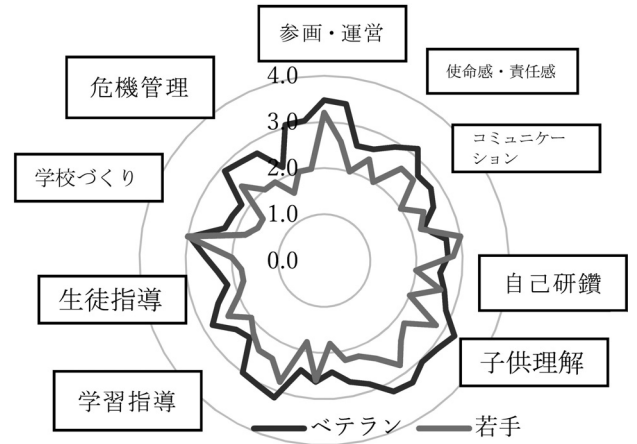


図9 「教師力」分析チェックシートのベテラン教師と若手教師の平均比較

いること、授業改善の姿勢があること、進んで教職員同士の関わりをもととする特徴があった(図9)。

この分析結果に即して、若手が持っている学ぶ姿勢、授業改善の姿勢、教職員同士の関わりをもつ姿勢、という強みを生かすことを中心に、OJTシートを活用してRPDCAサイクルによる実践の振り返りを試みた。教師力分析シートの結果から、自分の1年間の研究テーマを設定し、実践を記録し、省察していく。若年者担当教諭やベテラン教諭から、指導・助言をもらう手順を進めた。

b. ミニ学習会の開催

校内研修など全体での研修の活用が難しかったため、有志で実施するミニ学習会を実施した。教師としての総合力アップを目指し、「保護者対応と支援を要する児童への対応」というテーマで質疑応答も行った。

③ 保護者への働きかけ

a. 参観授業

参観日に、「学級活動家庭学習を見直そう」という授業の公開の実施。学級活動を保護者が参観。児童が家庭学習力アンケートの結果から、課題を克服するための方法を考える。計画の立て方、時間管理の仕方など具体的な方法を考え、それを保護者と共有した(図10)。

b. 朝食レシピの募集と発行

朝食を食べないと答える児童が増加傾向にあったため、学習習慣の基盤として朝食を欠かさず食べることは大切なものであるという意識を高めるために、保護者から募集し、作成した。調理は簡単もので、家庭科の実践の場・予習の場として活用されることを期待した(図11)。

c. 学習習慣形成に関わるたよりの発行

教師と保護者が連携を深め、児童により効果的な指導や支援を行っていけるように、学習習慣の形成に関するたよりを月に2回程度発行した。



図10 家庭学習を進めるコツについてグループ発表をする児童



図11 朝食レシピ集に掲載されているレシピの一部

IV 実践の検証

1 検証

1) 方法

教育実践の効果を検証するために、教育実践前後の児童用学校エンゲージメント尺度得点の変化について学年ごとの学校エンゲージメント得点の平均の差をt検定により分析を行った。加えて、計画した教育実践による家庭学習力の変化については、5年生・6年生について事前事後の家庭学習力得点8因子の得点の平均値の差をt検定により分析を行った。さらに、クラスター分析を用いて、5・6年生の学校エンゲージメント3因子と家庭学習力8因子による児童の分類し、学校エンゲージメントと家庭学習力の関係を検討した。

2) 調査対象

公立小学校4年生 3クラス計84名, 5年生3クラス計73名, 6年生3クラス 計71名

3) 調査時期

平成 X年 7月

4) 調査材料

(1) 児童用学校エンゲージメント得点

教育実践後に測定した児童用学校エンゲージメント尺度得点のうち、「行動エンゲージメント」7項目の平均、「感情エンゲージメント」3項目の平均、「認知エンゲージメント」3項目の平均得点を用いた。

(2) 家庭学習力アンケート得点

教育実践後に測定した家庭学習力アンケート8因子の平均得点を用いた。両調査とも回答法は4件法とし、選択肢は、「とてもあてはまる」「少しあてはまる」「あまりあてはまらない」「まったくあてはまらない」とし、4～1点を与えた。

5) 結果

教育活動実践前と実践後の学校エンゲージメントと家庭学習力アンケートの結果を表5に示す。

(1) 学校エンゲージメント得点の比較

4年生の感情エンゲージメントに有意差が見られた。

5. 6年生は変化が見られなかった。

(2) 家庭学習力アンケート

5年生において、「学習習慣」、「自律心」、「自己マネジメント力」、「自己学習力」、「自己成長力」に有意な差が見られた。

(3) クラスター分析

学校エンゲージメントの3つの下位尺度得点と家庭学習力8つの下位尺度得点を用いてクラスター分析を行った。学校エンゲージメントと家庭学習アンケートを分類し3つの「高」「中」「低」の点数にカテゴリー化した結果、以下のようになった。(表6)

2 考察

4年生の感情エンゲージメントに有意差がみられたのは、素直な気持ちで様々なに集中しているからだと考え。5・6年生については、教師の指導の場面が続くことが多かったことに影響があると考え。

家庭学習力アンケートの結果から、「学習習慣」、「自律心」、「自己マネジメント」、「自己学習力」「自己成長力」の伸びが見られた。家庭学習パワーアップ週間に合わせた、RPDCAサイクルのよさを実感し、取り組むよさを感じられたことに関係すると考える。「自己成長力」については、将来の夢について考える取り組みをしたことで、何のために学習をするのかということを考えるきっかけとなったようだ。2回目の実施後の感想には、自分の伸びを実感することよりも、できなかったことに注目が集まっていた。また、「できた」「できなかった」という感想に留まり、なぜできなかったのか、どうすればできるようになるのかにまで考えが及んでいなかったところが、エンゲージメントを高めるまでに至らなかったことと影

表5 学校エンゲージメント及び家庭学習力の平均値の差のt検定結果

	4年(N=84)				自由度	t値	5年(N=73)				自由度	t値	6年(N=71)				自由度	t値
	1回目		2回目				1回目		2回目				1回目		2回目			
	M	SD	M	SD			M	SD	M	SD			M	SD	M	SD		
行動エンゲージメント	3.30	.05	3.30	.58	84	.03	3.20	.53	3.30	.53	73	-1.80	2.80	.66	2.90	.75	71	-.60
感情エンゲージメント	3.00	.80	3.20	.79	84	-2.44 *	3.10	.67	3.10	.82	73	.00	2.60	.68	2.60	.83	71	-.10
認知エンゲージメント	3.50	.56	3.60	.41	84	-1.50	3.50	.48	3.50	.58	73	-.06	3.20	.58	3.20	.72	71	-.27
学習習慣平均	2.80	.70	-	-	-	-	2.80	.52	3.10	.55	73	-5.20 **	2.90	.73	2.90	.70	71	.73
生活習慣平均	3.20	.60	-	-	-	-	3.20	.62	3.30	.59	73	1.18	3.10	.85	3.10	.63	71	.68
自律心平均	3.10	.50	-	-	-	-	3.10	.56	3.40	.50	73	-4.43 **	3.20	.76	3.10	.67	71	.51
自己学習力平均	2.90	.60	-	-	-	-	2.90	.67	3.10	.72	73	-2.96 *	2.90	.88	2.90	.72	71	.84
自己コントロール力平均	3.20	.60	-	-	-	-	3.20	1.30	3.30	.64	73	-.18	3.00	.82	3.00	.71	71	.91
自己マネジメント力平均	2.40	.80	-	-	-	-	2.40	.77	2.60	.84	73	-2.20 *	2.20	.86	2.40	.85	71	.10
生涯学習力平均	3.00	.60	-	-	-	-	3.00	.81	3.10	.73	73	-1.49	3.00	.81	3.10	.65	71	.65
自己成長力平均	2.90	.80	-	-	-	-	2.90	.71	3.10	.69	73	-3.09 *	2.80	.83	3.00	.71	71	1.51

P<.05* P<.01**

表6 学校エンゲージメント及び家庭学習力による
クラスター分析結果

	C1	C2	C3
学習習慣	2.84 中	3.54 高	1.66 低
生活習慣	3.01 中	3.65 高	2.94 低
自律心	3.1 中	3.74 高	1.77 低
自己学習力	2.83 中	3.61 高	1.33 低
自己コントロール力	2.93 中	3.74 高	1.61 低
自己マネジメント力	2.15 中	3.25 高	1.38 低
生涯学習力	2.88 中	3.68 高	1.72 低
自己成長力	2.85 中	3.69 高	1.72 低
感情エンゲージメント	2.80 中	3.23 高	1.22 低
行動エンゲージメント	3.06 中	3.39 高	1.71 低
認知エンゲージメント	3.45 中	3.61 高	1.83 低
(N)	78	60	6

響があると考えられる。

記述統計分析よりC2のカテゴリーは、どの項目も高得点となっている。約半数の児童が、様々な取り組みの場を活かし、自分の力をのばしている。

C1のカテゴリーは、C2と比べて、1ポイント以上離れているのが、「自己マネジメント力」となっている。「自己マネジメント力」とは、「毎日どんな学習をしたか、ノートなどに記録を付けるようにしている」「計画したとおりに家で学習できたかどうか、ふり返って反省している」「自分の家庭学習の仕方をふり返って、改善している」である。自分の取り組みを記録し、できたかどうかふり

返り、改善につなげることの有効性、手順、意欲の継続が難しいのではないかとと思われる。自己マネジメント力に関わる力を伸ばし、できたという達成感や伸びている実感を伴うには、教師の働きかけは重要である。教師の支援があることで、よい変容につながっていくと考える。

C3は、集団の中では4%ではあるが、緊急に教師の介入が必要である児童がいると考える。「生活習慣」は、3つのカテゴリーの中でも得点が、2.94と高くなっている。保護者の協力が十分にあることが実証されていると考える。「自己学習力」「自己マネジメント力」は2ポイント以上低くなっている。教師の適切な支援がなければ、さらに状況が悪化していくであろう。C1の児童と同様、さらに手厚く、自分の取り組みを記録し、できたかどうかふり返り、改善につなげることの有効性、手順、意欲の継続を図ることができるように個別の対応が必要である。

エンゲージメントに関しては、行動や認知の部分で、C3の児童なりに取り組んでいると思われる。様々な活動に没頭できるように、個別に目的や取り組み方等が理解できる支援が必要なのではないかと考える。教師だけでなく、児童同士でも関わりを持つことで改善が期待される。

V 今後の課題

本研究の今後の課題として次の3点があげられる。

第1に、上位層の児童にとっては、見直しをもって取り組みやすく、自分の伸びを実感できる結果となった。一方で、教師の個別の支援が必要な児童にとっては、行ってきた取組が、エンゲージメントの変容にかかわるだけの大きな影響を及ぼさなかった。さらなる、教師の価値付けやフィードバック、児童同士の関わりが必要である。

第2に、児童の学習習慣の形成に関わる教師による共通実践が行われにくかったことである。学級の実態に合

わせて、担任の裁量で家庭学習が進められている。可能な範囲で個に合う課題を提示すること、児童会等の取組に、それぞれの学年や学級の実態に応じて更なる能動的な参加を促すことが大切であると考えます。

第3に、家庭学習に取り組んだことで、「テストのよい成績を収めることができた」、「授業がとてもよく分かった」という経験ができる場を多く設定することである。児童は、「取り組んでよかった」という経験を繰り返すことで、さらに家庭学習に取り組むようになる。それが、家庭学習力アンケートの伸びにつながり、さらには関係のある学校エンゲージメントの向上に関係すると思われる。

(注) 本研究は平成31年鳴門教育大学教職大学院における実践研究の一環として行ったものである。研究にあたって、実習校の協力と支援に厚く御礼申し上げます。

引用・参考文献

- Fredricks, J.A., Blumenfeld, P.C., & Paris, A.H. (2004) School engagement: Potential of the concept, state of the evidence. *Review of Educational Research*, 74, 59-109
- Fredricks, J.A., & McColskey, W. (2012) The measurement of student engagement; A comparative analysis of various methods and student self-report instruments: (EDS.) Christenson, S.L., Reschly, A.L. & Wylie, G. Research on student engagement. pp.763-782. Springer
- 池田誠喜 (2018) 中学生のスクール・エンゲージメントと精神的健康の関連 未公開
- 鹿毛雅治 (2016) 学習意欲の理論 金子書房
- Lippman, L., & Rivers, A. (2008). *Assessing school engagement: A guide for out-of-school time program practitioners*. Washington: Child Trends.
- 無藤 隆 (2018) 新しい教育課程における学びと教師力・学校力 図書文化社
- 文部科学省 (2017) 小学校学習指導要領
- 森裕二郎 (2017) 図画工作科において児童にエンゲージメントを作り出す試み 鳴門教育大学学校教育研究紀要 No.32 pp71 - 78
- 中谷素之 (2015) スクール・エンゲージメント促進のための動機付け介入研究 科学研究費助成事業 実施状況報告書
- 島井哲志 (2006) ポジティブ心理学 21世紀の心理学の可能性 ナカニシヤ出版
- 田中博之 (2017) アクティブ・ラーニングが絶対成功する！小・中学校の家庭学習アイデアブック 明治図書
- 田中博之 (2016) アクティブラーニング実践の手引き 教育開発研究所
- 田中勇作 (2008) 学校（教師）と家庭の連携の大切さ ベネッセ教育総合研究所
- 山岸鮎実 (2016) 高校生のスクール・エンゲージメント尺度の開発 asakura-laboratory.jp/wp-content/.../12/